

はじめに——「Mr. Vice President, I'm speaking」

あらゆる意味で異常な事態が続出した二〇二〇年のアメリカ大統領選挙の過程で、共和党のマイク・ペンス副大統領と民主党のカマラ・ハリス副大統領候補の討論は、一見穏やかに行われた。その一週間前のドナルド・トランプ大統領とジョー・バイデン大統領候補との討論では、トランプが討論のルールや司会者の質問を無視してバイデンの発言を遮り続け、討論がまるで成立せず、世界が愕然^{がくぜん}としていただけに、ペンスとハリスのやり取りはきわめて理性的で落ち着いたものとして多くの人の目に映った。

しかしその討論のなかで、視聴者の心に残った光景と言葉がある。ハリスの持ち時間中、彼女の発言を遮ってペンスが話し始めようとする、ハリスは彼の目をまっすぐ見つめ、片手をさっさと挙げてその言葉を制し、「Mr. Vice President, I'm speaking」（副大統領、私が話している最中なんです）」と言ったのだ。

割り込んで話をし続けるトランプに視線を向けず、下を向いて「Will you shut up, man?

(黙ってくれないか、お前) という言葉を吐いたバイデンとは対照的な、冷静沈着で、しかし断固とした一言であった。



カマラ・ハリスとマイク・ペンスが参加した米副大統領候補テレビ討論会の様子。ユタ大学キャンパスにて。2020年10月7日。写真：ロイター／アフロ

トランプと比べると頻度はずっと低かったとはいえ、ペンスは何度もハリスの発言中に話し始め、ハリスはあの「Mr. Vice President, I'm speaking」という一言を、九〇分の討論中何度も発した。それでも話を続けようとするペンスに向かって、怒りをあらわにするのではなく、満面に優しい笑顔さえ浮かべながら、穏やかにかつ毅然きぜんとした口調と表情で、「私の発言を終わりまで聞いていただけたら、きちんと討論ができますから」と丁寧に言うハリスの様子は、まるで子どもを諭す母親のようでもあった。

一方、彼女と文化を共有する女性たちが会話をする、俳優ウーピー・ゴールドバーグ司会のニュース討論番組『ザ・ビュー (The View)』では、「ママが

あの顔をしたときは、絶対ヤバイよね?」「うん、ヤバイ、ヤバイ!」と、討論者たちが互いに顔を見合わせ、身震いしていた。ママがあのだ笑顔になったときは、おふざけや反抗をやめて言う通りにした方がよい。ハリスの笑顔は、ママのはらわたが煮えくりかえり、雷雲が近づいていることに賢い子どもなら気がつくであろう、警告の笑顔だったのだ。

ハリスの威厳ある態度と落ち着いた言葉は世界で話題になったが、注目すべきは、彼女の発言の内容だけではなく、声量、口調、表情、所作などを含むその発話行為全体である。同番組内で感想を聞かれた弁護士のカニー・ホステインは、ハリスについてこう述べた。

私にとって彼女は、女性のアイデアを自分の手柄にしたり、何度も何度も繰り返して女性を遮って話したり発言を邪魔したりする男性がいる会議や仕事の場に同席したことのある、アメリカのすべての女性「の代表」でした。彼女はそんな状況のなかで、とてつもない気品を見せたと思います。だって彼女は、女性たち、特に有色の女性たち (women of color) がときにその犠牲となるような、「怒れる黒人女性」といった比喩などのあらゆるステレオタイプを回避しようと、最大限の注意を払っていたと思うから。もっと強く反撃することもできたと思うけれど、彼女はそうしなかった。ああいう自分を抑えるのに必要

となる感情的、精神的忍耐力を、私は本当によく知っているんです。〔『ザ・ヴェー』、米A

B C、二〇二〇年一〇月八日）

女性に対して何かと講釈を垂れる男性の言動を指した「マンスプレイング (mansplaining)」という造語が世に広まるほど、女性は職場でも学校でも街でも家庭でも、男性によって日常的に声を遮られ、言葉を奪われ、沈黙を強いられている。そして、その理不尽な抑圧への忍耐が沸点に達し、さまざまナリスクを覚悟で勇気を振り絞って声を上げると、その発言の正当性を疑われたり、服装や容姿や話しかたを問題にされたり、発言とは無関係の個人的な背景や過去を問われたりした上で、被害者ぶっている、あるいはヒステリックであるなどと非難を受ける。そうしたバックラッシュ (反発や反撃) によって発言者が傷つき、追い込まれていくだけでなく、発言そのものが葬られ、他の女性たちが発言する勇気も奪われてゆく。

こうした状況のなかで、女性が声を上げる際には、正当な内容の発言をすることはもちろん、その発言の場や方法、話の手順、口調や表情に至るまで、慎重に検討し、相手の思考や感情をあれこれと想定し、自分の声をしっかりと受け止めてもらえるためのさまざまな準備をしなければならぬ。それ自体が、多大な時間を要する重度の感情労働である。それを覚悟し、その

重荷を背負ってでも、女性たちはあえて声を上げてきた。そうしなければいけない状況があったからである。

本書では、アメリカの歴史・政治・社会・文化を専門とする五人の女性研究者が、アメリカ現代史において女性たちがあえて声を上げた場面を取り上げ、「声を上げる」という行為を考察する。ここでいう「声」には、発言だけではなく、沈黙や所作など、非言語の行為も含まれる。何が女性たちの言動を促し、彼女たちはどのような場面で、誰に向かって、どんな形で声を上げたのか。その決意や選択には、どのような考慮や計算があったのか。その声に、社会はどのように耳を傾けてきたのか、あるいはこなかったのか。そして女性たちの声は、どんな結果を生んできたのか。

そうした問いをさまざまな方向から考えるため、読者の多くに馴染みがあると思われる「とまきのひと」から、日本の一般読者にはあまり知られていないが歴史上重要な人物まで、一〇人の声を選んだ。

第I部では、#MeToo 旋風が吹き荒れ、ブラック・ライヴズ・マター（BLM）運動が世界を揺るがしていた二〇一八年から現在に至るまで、アメリカ社会そして世界に向けてそれぞれ

の形で大きな声を上げてきた五人。第Ⅱ部では、第二次世界大戦後から二〇世紀の終わりまでの半世紀に、民主主義を謳^{うた}うアメリカ合衆国においてその理念を問いかけた五人を扱っている。人種も年齢も社会的地位も性的アイデンティティも、そして生きた時代も場所も多様な一〇人である。声を上げた状況や方法も、訴えの内容もさまざまだ。しかしすべての声に通底するのは、自由で平等で真に豊かな世界の実現を信じ、それを阻む社会の構造的問題を問いただす、理想と信条と勇氣である。

それらの声に、耳を傾けてみてほしい。